

小夜啼鳥

NATTERGALEN

ハンス・クリスティアン・アンデルセン Hans Christian Andersen

青空文庫

みなさん、よくごぞんじのように、シナでは、皇帝はシナ人で、またそのおそばづかえのひとたちも、シナ人です。

さて、このお話は、だいぶ昔のことなのですがそれだけに、たれもわすれてしまわないうち、きいておくねうちもあろうというものです。

ところで、そのシナの皇帝の御殿ごてんというのは、どこもかしこも、みごとな、せとものずくめでして、それこそ、世界一きらびやかなものでした。

なにしろ、とても大したお金をかけて、ぜいたくにできているかわり、こわれやすく、うっかりさわると、あぶないので、よほどきをつけてそのそばをとおらなければなりません。御苑ぎよえんにはまた、およそめずらしい、かわり種の花ばかりさいていました。なかでもうつくしい花には、そばをとるものが、いやでもそれにきのつくように、りりりといねになるぎんのすずがつけてありました。ほんとうに、皇帝の御苑は、なにからなまでにじょうずにくふうがこらしてあって、それに、はてしなくひろいので、おかかえの庭にわづくでも、いったいどこがさかいなのか、よくはわからないくらいでした。なんでもかまわずどこまでもあるいて行くと、りっぱな林にでました。そこはたかい木立こだちがあつて、そ

のむこうに、ふかいみずうみをたたえていました。林をではずれるとすぐ水で、そこまで木のえだがのびているみぎわちかく、帆ほをかけたまま、大きなふねをこぎよせることもできしました。

さて、この林のなかに、うつくしいこえでうたう、一羽わのさよなきどりがすんでいましたが、そのなきこえがいかにもいいので、日びのいとなみにおわれているまじしい漁師りようしですらも、晩あみ、網あみをあげにでていつて、ふと、このことりのうたが耳にはいると、ついちどまつて、ききほれてしまいました。

「どうもたまらない。なんていいこえなんだ。」と、漁師はいいましたが、やがてしごとにかかると、それなり、さよなきどりのこともわすれていました。でもつぎの晩ばん、さよなきどりのうたついているところへ、漁師がまた網あみにでてきました。そうして、またおなじことをいいました。

「どうもたまらない、なんていいこえなんだ。」

せかいじゅうのくにぐにから、旅行者りようしゃが皇帝のみやこにやってきました。そうして、皇帝の御殿と御苑のりっぱなのにかんしんしましたが、やはり、このさよなきどりのうたをきくと、口をそろえて、



「どうもこれがいつとうだな。」といたしました。で、旅行者たちは、国にかえりますと、まずことりのはなしをしました。学者たちは、その都と御殿と御苑のことをいろいろと本にかきました。でもさよなきどりのことはけっして忘れないどころか、この国いちばんはこれだときめてしまいました。それから、詩のつくれるひとたちは、深いみずうみのほとりの林にうたう、さよなきどりのことばかりを、この上ないうつくしい詩につくりました。こういう本は、世界じゅうひろまって、やがてそのなかの二三冊は、皇帝のお手もとにとどきました。皇帝は金のいすにこしをかけて、なんべんもなんべんもおよみになって、いちいちわが意をえたりというように、うなずかれました。ごじぶんの都や御殿や御苑のことを、うつくしい筆でしているのをよむのは、なるほどたのしいことでした。

「さはいえど、なお、さよなきどりこそ、こよなきものなれ。」と、そのあとにしかし、ちやんとかいてありました。

「はてな。」と、皇帝は首をおかしげになりました。「さよなきどりというか。そんな鳥のいることはとんとしらなかつた。そんな鳥がこの帝国のうちに、しかも、この庭うちにすんでいるというのか。つきいたこともなかつたわい。それほどのものを、本でよんで始めてしるとは、いったいどうしたことだ。」

そこで皇帝は、さつそく侍従長じじゆつちやうをおめしになりました。この役人は、たいそう、かくしきばった男で、みぶんの下のものが、おそろおそろはなしかけたり、または、ものでもたずねても、ただ「ペ」とこたえるだけでした。ただしこの「ペ」というのに、べつだんのいみはないのです。

「この本でみると、ここにさよなきどりというふしぎな鳥がいることになっているが。」と、皇帝はおたずねになりました。「しかもそれがわが大帝国だいていこくない内で、これが第一等だいいいっとうのものだとしている。それをどうして、いままでわたしにいわなかったのであるか。」

「わたくしもまだ、そのようなものがあることは、うけたまわったことがございません。」と、侍従長はいいました。「ついぞまだ、宮中きゆうちゆうへすいさんいたしたこともございませぬ。」

「こんばん、さつそく、そのさよなきどりとやらをつれてまいって、わがめんぜんであたわせてみせよ。」と、皇帝はおっしゃいました。「みすみす、じぶんがもっていて、世界じゆうそれをしてしているのに、かんじんのわたしが、知らないではすまされまい。」

「ついぞはや、これまででききおよばないことでございます。」と、侍従長は申しました。「さつそくたずねてみまする。みつけてまいりまする。」

さて、そうはおこたえ申しあげたものの、どこへ行って、それをみつけたものでしょう。侍従長は御殿じゅうの階段を上つたり下りたり、廊下や広間のこらずかけぬけました。

でもたれにあつてきいても、さよなきどりのはなしなんか、きいたというものはありません。そこで侍従長は、また皇帝のごぜんにかけもどつてきて、さよなきどりのことは、本をかきましたものの、かつてなつくりばなしにちがいありませんと申しました。

「おそれながら陛下、すべて書物にかいてありますことを、そのままお用いになつてはなりません。あれはこしらえごとでございます。いわば、妖術魔法のるいでございませぬ。」

「いや、しかし、わたしがこの鳥のことをよんだ本というのは、」と、皇帝はおっしゃいました。「叡聖文武なる日本皇帝よりおくられたもので、それにうそいつわりの書いてあろうはずはないぞ。わたしはぜひとも、さよなきどりのこえをきく。どうあつても、こんぱんつれてまいれ。かれはわたしの第一のきにいりであるぞ。それゆえ、そのとおり、とりはからわぬにおいては、この宮中につかえるたれかれのこらず、夕食ののち、横ッ腹をふむことにいたすから、さようこころえよ。」

「チンペ。」と、侍従長は申しました。それからまた、ありつたけの階段を上つたり下

りたり、廊下や広間をのこらずかけぬけました。御殿の役人たちも、たれでも横ツ腹をふみにじられたくはないので、そのはんぶんは、いつしよになって、かけまわりました。そこで、世界じゆうがしつていて、御殿にいるひとたちだけがしらない、ふしぎな、さよなきどりのそうさくが、はじまりました。

とうとうおしまいに、役人たちのつかまえたのは、お台だいどころ所の下ばたらきのしがなむすめでした。そのむすめは、こういいました、

「まあ、さよなきどりですつて、わたしはよくしつておりますわ。ええ、なんていいこえでうたうでしょう。まいばん、わたくしは、びょうきでねている、かわいそうなかあさんのところへ、ごちそうのおあまりを、いただいてもつていくことにしておりますの。かあさんは、湖水こすいのふちに、すんでいましてね、そこからわたしがかえつてくるとき、くたびれて、林のなかでやすんでいますと、さよなきどりの歌がきこえます。きいているうち、まるでかあさんに、ほおずりしてもらうようなきもちになりましたね、つい涙なみだがでてくるのでございます。」

「これこれ、女中。」と、侍従長はいいました。「おまえに、お台所だいどころでしつかりした役をつけてやって、おかみがお食しょくじ事をめしあがるところを、おがめるようにしてあげる。そ

のかわり、そのさよなきどりのいるところへ、あんないしてもらいたい。あの鳥は、さっそく、こんばん、ごぜんにめされるのでな。」

そこでみんな、そのむすめについて、さよなきどりがいつもうたうという、林のなかへはいつて行きました。御殿のお役人が、はんぶんまで、いっしょについていきました。みんながぞろぞろ、ならんであるいて行きますと、いっぴきのめうしが、もうと、なきだしました。

「やあ。」と、わかい小姓こしやうがいました。「これでわかったよ。ちいさないきものにしては、どうもめずらしくすっかりしたこえだ。あれなら、たしかもうせん、きいたことがあるぞ。」

「いいえ、あれはめうしが、うなっているのよ。」と、お台所の下ばたらきむすめがいいました。

「鳥のところまでは、まだなかなかですわ。」

こんどはかえるが、ぬまの中で、けろけろとなきはじめました。

「りっぱなこえだ。」と、皇室づきの説教師せつきょうしがいました。「これ、どこかに、さよなきどりのこえをききつけましたぞ。まるでお寺のちいさなかねがるようじゃ。」

「いいえ、あれはかえるでございますわ。」と、お台所むすめはいいました。「でも、ここまでくれば、もうじき鳥もきこえるでしょう。」

こういつているとき、ちょうどさよなきどりが、なきはじめました。

「ああ、あれです。」と、むすめはいいました。「ほら、あすこに、とまっているでしょう。」

こういつて、このむすめは、むこうの枝えだにとまつている、灰色はいしたことを、ゆびさしました。

「はてね。」と、侍従長はいいました。「あんなようすをしているとは、おもいもよらなかつたよ。なんてつまらない鳥なんだ。われわれ高貴こうきのものが、おおぜいそばにきたのにおじて、羽根はねのいろもなくしてしまったにちがいない。」

「さよなきどりちゃん。」と、お台所むすめは、大きなこえで、いいました。「陛下へいかさまが、ぜひござんで、うたわせて、ききたいとおっしゃるのよ。」

「それはけつこうこの上なしです。」と、さよなきどりはいいました。そうして、さつそくうたいだしましたが、そのこえのよさといったらありません。

「まるで玻璃鐘はりしょうの音ねじやな。」と、侍従長はいいました。「あのちいさなのだが、よく

もうごくものだ。どうもいままであれをきいていなかったのがふしぎだ。あれなら宮中
も、上上のお首尾じやろう。」

「陛下さまのごぜんですから、もういちどうたうことにいたしまししょうか。」と、さよな
きどりはいいましたが、それは、皇帝ごじしんその場にきておいでになることと、おも
つていたからでした。

「いや、あつぱれなる小歌手、さよなきどりくん。」と、侍従長はいいました。「こん
ばん、宮中のえんかいに、君を招待するのは、大いによろこばしいことです。君は、
かならずそのうつくしいこえで、わが叡聖文武なる皇帝陛下を、うつとりとさせられる
ことをござろう。」

「わたしのうたは、林の青葉の中できいていただくのに、かぎるのですがね。」と、さよ
なきどりはいいました。でも、ぜひにという陛下のおのぞみだときいて、いそいそついて
いききました。

御殿はうつくしく、かざりたてられました。せとものでできているかべも、ゆかも、何
千とない金のランプのひかりで、きらきらかがやいていました。れいの、りりり、りり
りとなるうつくしい花は、のこらずお廊下のところにならべられました。そこを、人びと

があちこちとはしりまわると、そのあおりかぜで、のこらずのすずがなりひびいて、じぶんのこえもきこえないほどでした。

皇帝のおでましになる大ひろまのまん中に、金のとまり木がおかれました。それにあのさよなきどりがとまることになっていました。宮中の役人たちのこらず、そこにならびました。あのお台所の下ばたらきむすめも、いまではせいしきに、宮中づきのごぜん部ぶがかり係にとりたてられたので、ひろ間のとびらのうしろにたつことをゆるされました。みんな大だ礼れい服ふくのはれすがたで、いっせいに、陛下がえしやくなされた灰いろのことに目をむけました。

さて、さよなきどりは、まことにすばらしくうたつてのけたので、皇帝のお目にはなみだが、みるみるあふれてきて、それがほおをつたわって、ながれおちたほどでした。するとさよなきどりは、なおといっそういいこえで、それは、人びとのこころのおくそこに、じいんとしみいるように、うたいました。陛下は、たいそう、およろこびになつて、さよなきどりのくびに、ごじぶんの、金のうわぐつをかけてやろうとおっしゃいました。しかし、さよなきどりは、ありがとうございますが、もうじゆうぶんに、ごほうびは、いただいておりますといいました。

「わたくしは、陛下のお目になみだのやどったところを、はいけんいたしました。もうそれだけで、わたくしには、それがなによりもけっこうなたからでございます。皇帝の涙というものは、かくべつなちからをもっております。神かけて、もうそれが身にあまるごほうびでございます。」

こういつて、そのとき、さよなきどりは、またもこえをはりあげて、あまい、たのしいうたをうたいました。

「まあ、ついぞおぼえない、いかにもやさしくなでさすられるようなかんじでございませわ。」と、まわりにたつた貴婦人きふじんたちがいいました。それからというもの、このご婦人たちは、ひとからはなしかけられると、まず口に水をふくんで、わざとぐぐとやって、それで、さよなきどりになつたつもりでいました。とうとう、すえずえの、べつとうとか、おはしたというひとたちまでが、この鳥には、すっかりかんしんしたと、いいだしました。この連れんじゆう中ちゆうをまんぞくさせることは、この世の中でおよそむずかしいことでしたから、これはたいしたことでした。つまり、さよなきどりは、ほんとうに、うまくやってのけたわけでした。

さて、さよなきどりは、それなり宮中にとめられることになりました。じぶん用のとり

かごをいただいて、まいにち、ひる二どと、よるいちどとだけ、外出をゆるされました。でかけるときには、十二人のめしつかいがひとりひとり、とりのあしにむすびつけたきぬいとを、しつかりもつて、おともをして行きました。こんなふうにしてでかけたのでは、いつこうにおもしろいはずがありませんでした。

このめずらしいさよなきどりのことは、みやこじゅうのひょうばんになりました。そうして、ふたりであえば、そのひとりが、

「*さよ。」と、いうと、あいては、「なき。」とこたえます。

*デンマークの原語では「ナデル（小夜）」。「ガール（啼鳥）」。「ガール」にはおばかさんの意味もある。

それから、ふたりはほつとためいきをついて、それでおたがい、わけがわかっていました。いや、物売のこどもまでが、十一人も、さよなきどりという名をつけられたくらいです。でも、そのうちのひとりとして、ふしらしいもののうたえるのでは、ありませんでした。――

ところで、ある日、皇帝のおてもとに、大きな小包こつつみがとどきました。その包のうわがきに、「さよなきどり。」と、ありました。

「さあ、わが国の有名なことりのことを書いたしよもつが、またきたわい。」

皇帝はこうおっしゃいましたが、こんどは、本ではなくて、はこにはいった、ちいさなさいく物ものでした。それはほんものにみまがうこしらえものの、さよなきどりでしたが、ダイヤモンドだの、ルビイだの、サファイヤだのほうせきの宝石が、ちりばめてありました。ねじをまくと、さつそく、このさいく物の鳥は、ほんものの鳥のうたうとおりを、ひとふしうたいました。そうして、上したに尾をうごかすと、金や、銀が、きらきらひかりました。首のまわりに、ちいさなりボンがいわえつけてあつて、それに、

「日本皇帝のさよなきどり、中華皇帝のそれにはおよびもつかぬ、おはずかしきものながら。」と、書いてありました。

「これはたいしたものだ。」と、みんなはいいました。そうして、このさいく物もののことりははこんできたものは、さつそく、帝室ていしつさよなきどりけんじょうし献上使、というしようごうをたまわりました。

「いっしょになかしたら、さぞおもしろい二部合がっしょう唱しょうがきけるだろう。」

そこで、ふたつのさよなきどりは、いっしょにうたうことになりました。でも、これはうまくいきませんでした。それは、ほんもののさよなきどりは、かってに、じぶんのふし

でうたつて行きましたし、さいく物のことりは、ワルツのふしでやったからでした。

「いや、これはさいく物のことりがわるいのはごぎいませぬ。」と、くないがくしちよう宮内楽師長がいました。「どうしてふしはたしかなもので、わたくしどもの流儀りゆうぎにまったくかなつております。」

そこで、こんどは、さいく物のことりだけがうたいました。ほんもののおなじようになまくやつて、しかもちよいとみたところでは、ほんものよりは、ずっときれいでした。それはまるで腕輪うでわか、胸むねにとめるピンのように、ぴかぴかひかかっていました。

さいく物のことりは、おなじところを三十三回も、うたいましたが、くたびれたようすもありませんでした。みんなはそれでも、もういちどはじめから、ききなおいようでしたが、皇帝は、いきているさよなきどりに、なにかうたわせようじゃないかと、おっしゃいました。——ところが、それはどこへいったのでしょうか。たれひとりとして、ほんものさよなきどりが、あいていたまどからとびだして、もとのみどりの森にかえつていったことに、気づいたものは、ありませんでした。

「いったい、これはどうしたというわけなのか。」と、皇帝はおっしゃいました。ところが、御殿の人たちは、ほんものさよなきどりのことを、わるくいって、あのさよなきど

りのやつ、ずいぶん恩しらずだといいました。

「なあに、こちらには、世界一上等の鳥がいるのだ。」と、みんないいました。

そこで、さいく物のことが、またうたわせられることになりました。これで三十四回おなじうたをきくわけになったのですが、それでもなかなか、ふしがむずかしいので、たれにもよくおぼえることができませんでした。で、楽師長は、よけいこのとりをほめちぎって、これはまったく、ほんものさよなきどりにくらべて、つくりといい、たくさんのみごとなダイヤモンド飾りといい、ことさら、なかのしかけといたら、どうして、ほんものよりはずつとりつばなものだといいきりました。

「なぜと申しまするに、みなさま、とりわけ陛下におかせられまして、ごらんのとおり、ほんものさよなきどりにいたしますると、つきになにをうたいだすか、まえもつて、はかりしることができません。しかるに、このさいくどりにおきましては、すべてがはつきりきまつております。かならずそうなつて、かわることがございません。これはこうだと、せつめいができます。なかをあけて、どうワルツがいられてあるか、それがうたいすんで、歌がつぎからつきへとうつって行きますぐあいを、人民ども、だれのあたまにもはいるように、しめしてみせることが、できるのでございます——。」

「まったくご同感どうかんであります。」と、みんなはいいました。

そこで、楽師長は、さつそく、つぎの日曜日にちようびには、ひろく人民たちに、ことり拝観はいかんをゆるされるようにねがいました。ついでにうたもきかせるようにと、皇帝はおめいじじになりました。そんなわけだれもそのうたをきくことになって、まるでお茶によったようによろこんでしまいました。このお茶にようということは、シナ人のくせでした。そこでみんな、「おお。」と、いったのち、人さしゆびをたかくさし上げて、うなずきました。けれども、ほんもののさよなきどりをきいたことのある、れいのびんぼう漁師りようしは、「なかなかいいこえでうたうし、ふしもにているが、どうも、なんだかものたりないな。」といいました。

ほんもののさよなきどりは、都の土地からも、国からもおわれてしまいました。

さいくどりは、皇帝のお寝台ねだいちかく、絹きぬのふとんの上に、すわることにきまりました。

この鳥に贈られて来た黄金と宝石が、のこらず、鳥のまわりにならべ立てられました。鳥は、「帝室御夜詰歌ていしつおんよづめかしゆちよう手長」の栄職えいしよくをたまわり、左側第一位ひだりがわだいいちいの高位たかゐにものぼりました。たいせつなしんぞうが、このがわにあるというので、皇帝は、左がわひだりをことにおもんぜられました。するとしんぞうは、皇帝でもやはり左がわにあるとみえますね。それ

から、れいの楽師長は、さいくどりについて、二十五巻もある本をかきました。さて、この本は、ずいぶん学者ぶつてもいて、それに、とてもしちむずかしい漢語かんごがいっぱい、つかつてありました。そのくせたれも、それをよんでよくわかったといっていました。が、それはたれもばかものだとおもわれた上、横ッ腹をふまれるのがいやだからでした。

そうこうしているうちに、まる一年たちました。皇帝も、宮中のお役人たちも、みんなほかのシナ人たちも、そのさいくどりの歌の、クルツク、クルツク、という、こまかいふしまわしのところまでのこらずおぼえこんでしまいました。ところでそのためよけい、この鳥がみんなをよろこばせたというわけは、たれもいっしょになって、その歌をうたうことができたからで、またほんとうに、そのとおりやっていました。往来をあるいている子どもたちまでが、

「チチチ、クルツク、クルツク、クルツク」と、うたうと、皇帝もそれについておうたひになりました。——いや、もうまつたくうれいことでした。

ところがあるばん、さいくどりに、せいっぱいうまくうたわせて、皇帝はね床の中でそれをきいておいでになるうち、いきなり、鳥のおなかの中で、ぶすつという音がして、

なにかはぜたようでした。つづいて、がらがらと、のこらずのはぐるまが、からまわりになまわって、やがて、ぶつんと音楽はとまってしまいました。

皇帝はすぐとね床をとびおきて、侍医じいをおめしになりました。でも、それがなんの役にたつでしょう。そこで時計屋とけいやをよびにやりました。で、時計屋がきて、あれかこれかと、わけをきいたり、しらべたりしたあげく、どうにか、さいくどりのこしうだけは、なおりました。でも、時計屋は、なにしろ、かんじんな軸じくうけが、すっかりすりへっているのに、それをあたらしくとりかえて、音楽をもとどおりはつきりきかせるくふうがつかないから、せいぜい、たいせつにあつかっていただくほかはないと、いいました。これはまことにかなしいことでした。もう一年にたつたいちどだけ、うたわせることになったのですが、それさえ、おおすぎるといのです。でもそのとき、楽師長は、れいの小むずかしいことばかりならべた、みじかいえんぜつをして、なにも、これまでとかわったところはないと、いいましたが、なるほど、歌は、これまでとかわったところは、ありませんでした。

さて、それから五年たちましたが、こんどこそはほんとうに、国じゅうの大きなかなしみがやってきました。じんみんたちが、ここからしつていた皇帝が、こんど、ごびよ

うきにかかられて、もうながいことはあるまいという、うわさがたちました。あたらしい皇帝も、もうかわりにえらばれていました。じんみんたちは往來おうらいにあつまって、れいの侍従長に、皇帝さまは、どんなごようだいでございますかと、たずねました。するとこのひとは、いつものように「ペ」といって、あたまをふりました。

ひえこおった青いかおをして、皇帝は、うつくしくかざりたてた、大きなおねだいに、よこになっておいでになりました。宮中の役人たちは、もう皇帝は、おなくなりになったと、おもつて、われがちに、あたらしい皇帝のところへ、おいわいのことばを、申しあげに出かけていきました。その下のめし使のおとこたちも、そここことかけまわって、そのことでしゃべりあいました。めし使の女たちもあつまって、さかなお茶の会をやっていました。広間にも、廊下にも、のこらず、ぬのがしかれているので、なんの足音もきこえず、御殿の中はまったく、しんかんとしていました。

けれども陛下は、まだおかくれになったというわけではなく、やせほそり、色は青ざめながら、ながいびろうどのとばりをたれて、どつしりとおもい金のふさのさがった、きらびやかなしんだいの上にやすんでおいでになりました。高いところにあるまどが、あけてあつて、そこからさしこむ月のひかりが、陛下とそのそばにおかれた、さいくものさよ

なきどりを、てらしていました。

「おかわいそうに、皇帝は、まるでなにかが、むねの上ののってでもいるように、いきをすることもむずかしいようすでした。陛下が目をみひらいて、ごらんになると、おむねの上には、死しにがみ神が、皇帝の金のかんむりをかぶり、片手には皇帝のけんを、片手に皇帝のうつくしいはたをもつて、すわっていました。そうして、りっぱなびろうどのとぼりの、ひだのあいだには、ずらりと、みなれない、いくつものくびがならんで、のぞきこんでいました。ひどくみにくいからおつきをしているものもありましたが、いたっておとなしやかなものも、ありました。これらのくびは、みんな、この皇帝のこれまでなされた、よいおこないや、わるいおこないで、いま、死神がそのしんぞうの上にすわったというので、みんなきて、ながめているというわけでした。

「このことを、おぼえているか。」

「こんなことも、やっatarou。」

と、かわるがわる、そのくびが、ささやきました。それから、つづいて、がやがやしやべりたてるので、皇帝のひたいからは、ひやあせが、ながれました。

「わたしは、そんなことは、しらないぞ。」と、皇帝は、おっしゃいました。

「音楽をやってくれ、音楽を。たいこでも、がんがんとたいて、あのこえの、きこえないようにしてくれ。」と、陛下はおさげびになりました。けれども、くびはかまわず、なおもはなしつづけました。そうして死神は、くびのいったことには、どんなことでも、シナ人らしくうなずいてみせました。

「音楽をやってくれ、音楽を。小さいうつくしい金のことりよ。うたってくれ。まあうたってくれ。おまえには、こがねもやった。宝ほうせき石もあたえた。わたしのうわぐつすら、くびのまわりに、かけてやったではないか。さあ、うたってくれ。うたってくれ。」と、陛下はおさげびになりました。

ところが、そのことりは、じつとしていました。あいにく、たれも、ねじをまいてやるものがなかったのです。このことりは、うたうことができなかったのでございます。

死神しにがみはなおも大きな、うつろな目で、皇帝をじろじろみつめていました。そしてあたりは、まったくおそろしいほど、しいんとしていました。

そのとき、きゆうにまどのとこから、この上もないかわいらしいうたが、きこえてきました。それは、まどのそのの枝にとまった、あの小さな、ほんものさよなきどりがうたったものでした。さよなきどりは、皇帝がご病気だときいて、なぐさめてあげるために、



げんきをつけてあげるために、歌をうたいに、やってきたのでした。さよなきどりが、うたうにつれて、あやしいまぼろしは、だんだん影がうすれて行きました。血は皇帝のおからだの中を、とつとつとまわりだしました。死神さえ、耳をとめて、そのうたをきいて、こういいました。

「もつとうたつてくれ、さよなきどりや。もつとうたつてくれ。」

「はい。そのかわり、あなたは、そのこがねづくりのけんをくれますか。そのりっぱなはたをくれますか。皇帝のかんむりをくださいますか。」

そこで死神は、うたをひとつうたつてもらうたんびに、かわりに、三つのたからを、ひとつずつやりました。

さよなきどりは、ずんずんうたいつづけました。そして、まっしろなばらの花が咲いて、にわたこの花がにおい、青あおした草が、いきのこっている人たちのなみだでしめっているはかばのことをうたいました。きいているうち、死神はふと、じぶんの庭がみたくなくなったものですから、まどのところから、白いつめたい霧きりになって、ふわりふわり出ていきました。

「ありがとう、ありがとう。」と、皇帝はおっしゃいました。「天国のことりよ、わたし

はよくおまえをおぼえているぞ。わたしはおまえを、この国からおいだしてしまつたが、それでもおまえは、わたしのねどこから、いやなつみのまぼろしを、歌でけしてくれた。わたしのしんぞうに、とりついた死神を、おいはらつてくれた。そのほうびには、なにをあげたものであろうか。」

「そのごほうびなら、もういただいておきます。わたくしがはじめて、ごぜんでうたいましたとき、陛下には、なみだをおながしになりました。わたくしは、けつしてあれをわすれはいたしません。あのおなみだこそ、歌をうたうものの、こころをよろこばす、宝石でございます。なにはとにかく、おやすみあそばせ。そうして、またおげんきに、お丈夫じょうぶにおなりなさいまし。なにかひとつ、うたつてさしあげましょう。」

そこで、さよなきどりは、うたいだしました。——それをききながら、皇帝は、こころもちよく、ぐつすりと、おやすみになりました。まあ、どんなにそのねむりは、やすらかに、こころのやすまる力をもつものでしたろう。

皇帝はまた、げんきがでて、すっかりご丈夫になつて、目をおさましになつたとき、お日さまは、まどのところから、さしこんでいました。おそばづきの人たちは、陛下がおかくれになつたこととおもつて、ひとりもまだ、かえつてきませんでした。ただ、さよ

なきどりだけは、やはりおそばにつきそって、歌をうたっていました。

「おまえは、いつもわたしのそばにいてくれなければいけない。」と、皇帝はおっしゃいました。「おまえのすきなときだけ、うたってくれればいいぞ。こんなさいくどりなどは、こなごなに、たたきこわしてしまおう。」

「そんなことを、なすつてはいけません。」と、さよなきどりはいいました。「そのことりも、ずいぶんながらくおやくにたちました。いままでどおりに、おいておやりなさいまし。わたくしは、御殿の中に、巢をつくつて、すむわけには、まいりませんが、わたくしがきたいとおもうとき、いつでもこさせていただきます。そうしますと、わたくしは晩になりました、あのまどのわきの枝に、とまります。そして、陛下のおところがたのしくもなり、また、おこころぶかくなりますように、歌をうたつて、おきかせ申しましょう。そうです、わたくしは、幸福なひとたちのことをも、くろうしている人たちのことをも、うたいましょう。あなたのお身のまわりにかくれておりますわるいこと、よいこと、なにくれとなくうたいましょう。まずしい漁師のやどへも、お百ひやく姓しやうのやねへも、陛下から、またこのお宮から、とおくはなれてすまっておりますひとたちの所へも、この小さな歌うたいどりは、とんで行くのでございます。わたくしは、陛下のおかんむりよりは、もっと

陛下のお心がすきでございます。もつとも王冠は王冠で、またべつに、なにか神聖しんせいとでも申したいにおいが、いたさないでもございませぬ。——ではまた、いずれまいって歌をうたつてさしあげましょう。——ただここにひとつおやくそくしていただきたいことがございませぬ——。」

——「どんなことでも。」と、皇帝はおつしやりながら、たちあがって、ごじぶんで皇帝のお服をめして、金のかざりでおもくなつている劔けんを、むねにおつけになりました。

「それでは、このひとつのことを、おやくそく、くださいまし。それは、陛下が、なにごとでも、はばかりなくおはなし申しあげることをおもちになつていらつしやることを、だれにもおもらしにならないということでございます。そういったしますと、なおさら、なにごともつごうよくまいることでしょう。」

こういつて、さよなきどりは、とんでいきました。

おつきの人たちは、そのとき、おかくれになつた陛下のおすがたを、おがむつもりで、はいつてきました。——おや、つと、そのまま棒ぼうだちに立ちすくみました。そのとき皇帝はおつしやいました。

「みななもの、おはよう。」



青空文庫情報

底本：「新訳アンデルセン童話集 第二巻」同和春秋社

1955（昭和30）年7月15日初版発行

※「旧字、旧仮名で書かれた作品を、現代表記にあらためる際の作業指針」に基づいて、底本の表記をあらためました。

※底本中、*で示された語句の訳註は、当該語句のあるページの下部に挿入されていますが、このファイルでは当該語句のある段落のあとに、5字下げで挿入しました。

入力：大久保ゆう

校正：鈴木厚司

2005年6月15日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

小夜啼鳥

NATTERGALEN

2020年 7月17日 初版

奥 付

発行 青空文庫

著者 ハンス・クリスティアン・アンデルセン Hans Christian Andersen

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>